

横浜国際港都建設審議会

第2回部会 第2部会（グローバル化関連）

平成17年7月29日（金）

《出席委員》小林重敬委員(部会長)、飯沢清人委員、加納重雄委員、黒川勝委員
志村善一委員、トイ チャールズ フォーテ委員、萩原なつ子委員、長谷川まや委員、
バルディア イワティ チャンドラウ委員、森敏明委員、横山正人委員、
<欠席>岡部明子委員、高梨昌芳委員、吉村恭二委員

議事

【事務局】

定刻ですので始めさせていただきたいと思います。今日はお忙しい中、またお暑い中、出席いただきまして、どうもありがとうございます。国際港都建設審議会の第2部会、グローバル化関連部会の第2回をこれから始めさせていただきたいと思います。

前回欠席でした志村委員と黒川委員が出席していただいていますので、自己紹介をお願いいたします。

各委員自己紹介

【事務局】

それでは事務局から資料について、簡単に説明させていただきたいと思います。

事務局より資料説明

【部会長】

ありがとうございます。それでは資料について一括してご説明いただきました。中心
的な議論は最後に大きいA3判の、ここで紹介された、これまでのご意見ですね。何度
かの機会を通じていただいたものを事務局で整理してまとめていただいたものです。こ
れをベースにしながら、もう少しこういう視点があるのではないかと、あるいはこう
いう要素について抜けているのではないかとというようなご議論をさまざまな形でいた
だいて、最終的にはまちづくりについての、かなり構想的な部分ですから、比較的抽象
的なまとめになるかと思います。しかし、抽象的なまとめになるにしても、それがどれ
だけ、さまざまな具体的な表現をもとにそういうものをつくられているかどうか、その

質によって随分大きな枠組みとしての構想の質も変わってくるものですから、できるだけさまざまな意見を、今日いただいております。

最初に、これからの進め方の議論がありましたけれども、これについては特に何かご意見ございますか。最初に説明いただきました第2回第2部会グローバル化関連ということで、後ろに進め方があって、これは大体、以前からご紹介いただいているような形なんですけれども、このような形で進めていくということです。よろしいでしょうか。よろしければ、参考としてご紹介いただいたグローバル化をとらえる視点というようなものを横に置きながら、A3の紙を中心にご意見、ご議論をいただきたいと思います。いかがでしょうか。

項目として、文化とか芸術、情報化あるいは産業という議論があるんですけど、よく創造性という言葉が最近、都市の中で使われているんですね。物事を新たにつくり出す。単に産業の活性化ではなくて、単に文化芸術ではなくて、そういう文化や芸術をベースにしながら新しい産業をさまざまに生み出す。そういう創造都市という言葉が使われておりまして、その辺の創造性という言葉がこの中に抜けているような気もするんですけど、その辺は今まで議論なかったですかね。

【事務局】

この3回、前回及びこのシンポジウムという中ではございませんでした。ただ、最近では、今、先生おっしゃったとおり、文化芸術創造都市というのが横浜市の1つの考え方ですので、それにつきましては、今のご意見の中に入れていきたいなというふうに考えております。

【部会長】

どうでしょうか。ほかの項目でもいいのですが、そのような形でご意見いただければありがたいと思います。

【委員】

国際都市という幾つかの切り口があるんですが、ここの中で私も前々から気になっていたことは、横浜の国際性あるいは国際都市、いろんな都市が今、海外との関係だとか国際交流だとか、あるいは姉妹都市との交流だとか、あるいは企業の海外進出あるいは企業誘致だとか、同じようなことをやっておるわけです。たまたま数日前、私、札幌を訪問したときも、北の拠点というか、同じようなことをやっているんです。ならば、横浜の国際都市はどのような方向でつくっていくべきなのかということで、やはり横浜ら

しい国際都市、これが非常に難しいんですが、やっぱり中小企業の技術力や市民の、そういった国際性、解放性、そういうようなことを生かしながら、グローバル化する中で競争が激化する。もちろん競争に企業レベルで勝たなきゃいけない。ただ、それだけじゃなくて、その中でいかに海外の都市あるいは地域の人に横浜として協力していいのか、あるいは貢献という言葉がありますね、コントリビューションということもあると思います。そんな貢献したって何の得があるかというような議論もあると思いますけれども、やはり日本の中で横浜は世界に先駆けて開かれた都市。だからこそ先導的に、先進的に貢献していく、そういった活動というものを、やっぱり今後、横浜としての将来を展望したときに避けて通れない使命でなかろうかと私は思っておりますので、ぜひ国際貢献という範疇の中でいろんな取り組みを、私個人的にもしていただきたいと思いますので。そこで、この中にぜひ入れてもらいたいなと思っております。

【部会長】

今のお話は、前回のシンポジウムの際に国際都市の中の教育・人材育成の中の一番下に・があります。これは、今、日本人船員というのは、船員でもランクの上の方は日本人がかなりいるのだけど、それ以外の部員とここで書いてありますが、そういう方は日本人ではない、極めてグローバル化していると。そういう方々をむしろ教育する、上のランクの方々を教育する国際的な機関はオランダにある。しかし、部員という立場にある方を教育する機関は国際的にないので、横浜は港をベースに経済が発展してきたわけですから、こういう国際的な船員教育機関をつくったらいいのではないかという提言がありました。まさにコントリビューション、貢献する、しかもグローバルな話題を持った貢献をするという、こういう提案も中に出てきております。例えば、こういうのも一例だろうと思います。

【委員】

今、船員教育という、教育的に世界に貢献することなんですが、私は環境問題なり、あるいは中小企業の技術力を生かした、経済と環境という、対内的な面では出ていますけれども、むしろ途上国というんですか、アジア地域の環境改善、あるいは河川、あるいは森林、横浜はそういうことで国際機関を誘致しています。ITTOだとか、あるいはシティネットを通じた、そういった活動。ただ、そういう国際機関の誘致、いろんなことをやっていますけれども、それがトータル的にどの程度の横浜の海外への貢献になっているのか。もちろん市民にとってはほとんど知られていない。国際都市、いろ

んなことをやってますと言ったって、市民一丸となって盛り上がらない。そういった今のサミットの誘致だとか、昔はオリンピックの開催だとか、いろんなことを花火は打ち上げていましたけれども、それが市民的な一体感にならない。この関内地区では山下地区の、あるいは役所中心の中でしたか、そういったことがなされていない。やっぱり、もっともっと360万市民の盛り上がりの中で海外に貢献していくというような仕掛けが必要だと思いますし、いろんな分野があろうかと思いますが、そういうのをぜひ横浜らしさというもので取り込んでいただきたいと思います。

【委員】

この枠は国際都市のところに今、話がある。ほかでも、都市構造でもよろしいですか。

【部会長】

あるいは、今のご意見に関連して、もしご意見があれば先にそれをいただいて、その後。

【委員】

都市と都市の協力がこれからすごく増えるんですね。横浜はよくやっていると感じますが、マーケティングがまだ足りないんですね。例えば、私は前のミーティングのときも申し上げましたが、横浜はITをもっと活用して欲しい。データを見ると、横浜市民では、45%だけがインターネットを使っているんですよ。ソウルではインターネット普及率は98%になります。横浜では光通信といったシステムがあまり進んでいないし、コストもまだ高いと思います。横浜のウェブサイトについても、ウェブサイトは外国にとって都市の顔ですよ。他の都市を見れば、例えば仁川とかソウルでは、ウェブサイトを見れば英語もありますし、中国語もありますし、ハングルもありますし、すごくシティーマーケティングをしています。だから、横浜にも、やっぱりウェブサイトやインターネットを、もうITの時代なので、もっともっと使ってほしいと思います。

それから、グローバルシティになるためには、いろいろなやらかなくちゃいけないことがあります。もうひとつの問題は、言葉です。英語はグローバル・ランゲージなので、やはり子供の頃から英語を学ぶことは大切だと思いますが、それだけではなく、子供の頃から、今住んでいる横浜以外の別の世界があることを分かって欲しい。オープンマインドの形成ですね。フォーリンビレッジ・フォー・チルドレンという事例があります。これはパスポートを持って、このエリアに入ればすべて英語を使う、そういうビレッジをつくれればいいと思っています。

もうひとつ、私が気になることとしては、グローバルシティになるためには人間のマインドセットも関係があります。私たちが本当にオープンマインドかどうか、振り返って整理したほうが良いと思います。さらに、グローバル化にはマンパワーも大切だと思うので、研修の実施も良いと思います。

それから、私が気になるのは、東京と横浜の関係です。東京はコアにあるポートシティであり、横浜もポートシティですが、東京と競争すると、負けると思います。どうしてかという、東京はキャピタルシティだからなんです、東京にないものを横浜につくったほうが良いと思います。差異化ですね。私が外国に行くと、いつも横浜はどこにありますかとか、東京から何時間飛行機に乗るのかとか、そういうことを結構聞かれます。横浜がグローバルなまちになるためには、ITの活用もひとつの方法ですが、横浜の都市としての知名度を上げて欲しい。というのもスリランカとかネパールとか、外国に行ってみると「YOKOHAMA」の名前を聞くときは車のタイヤの名前とされている。

最後に、仁川と上海と横浜、私から見れば都市の形が似ています。というのもみんなポートシティなんですね。それで、仁川は東アジアにおけるハブ機能を構築したいと考えている。上海も横浜も同じことを考えている。私は経済の専門家じゃないですが、3都市は競争相手でもあるけれど、都市間でフリートレードゾーンを作る協定を結び、各都市自体の取扱高を上げるなど、都市間協定による相乗効果を狙えると思っています。こういうことはネイバー、近隣市とやっぱり一緒にすることになると思います。仁川も横浜にすごく興味があって、毎年、横浜に副市長が来浜している。シスターシティになるのは、ちょっと横浜としては難しいようですが、一緒にやりたい気持ちは皆さん高いと思います。だから、ぜひそういうことをできれば良いと思います。

ありがとうございました。

【部会長】

たしかソウルは、団地ごとに電話交換局が置いているので、インターネットが非常に使いやすいように国を挙げてやったんですよね。98%というインターネット利用率を持っているんですけども。その辺は確かに日本はまだまだなのかもしれませんが、横浜の市のウェブサイトというのは、どこがどういう形で管理してるか確認する必要があります。

【委員】

今お話がありましたとおり、都市間のネットワークであったりとか、同じような港湾

都市の間での結びつきというのをもっと強めなきゃいけないんじゃないかという、そんなことを今考えています。地方分権の時代になって、地域が地域の個性を發揮していかなければいけない。その中で地域間の、おそらく都市間競争というのが、もっとこれからどんどん激化してくると思うんですね。競争する相手も都市の間では必要だと思えますけれども、一方で協力し合う相手というのを探さなければいけない。そういう中で、ある程度アライアンス的な形で、いろんな都市と結びつきを強めていくことというのが大事なんじゃないかなというようなことで、わかりやすい言葉でいうと都市間F T Aという言葉を我々使おうというふうに今考えています。国と国との間でのF T Aというのは今なかなか頓挫していて、うまく進まないみたいですが、例えば横浜の姉妹港湾の中で、上海であったりバンクーバーであったり、そういう都市との間での貿易に関しては、ある程度フリーな、関税や通関の手続なんかも含めて、そういう部分で仲のいい港湾都市間でアライアンスをきちんと結んでいる、そういう都市の間では、出来る部分についてはしっかりメリットを出していこうとか、ある程度の範疇の中では自由なことを認めていこうじゃないか、そんなようなことをしてみてもおもしろいんじゃないかなというようなことを考えています。そういう意味では、シティネットさんなんかやっているような、市民レベルの交流ということではなくて、経済的なことであつたりとか、規制緩和であつたりとか、そういうことも含めた中で都市間の中である一定の仲間内の都市の間ではより強い結びつきを持って、その中で都市と都市の間でのあらゆる部分での協力、経済も含め、例えば教育も含め、そんな部分での協力を、今の姉妹都市というレベルでなく、それをもっともっと強い結びつきにしていって、もう少し深い交流ができたりですとか、経済的な部分でも結びつきがどんどん深まっていったらいいのにな、できないのかなと、それは特区というような制度を使つたりとか、規制緩和であつたり条例であつたり、いろいろなやり方が今の時代、ありますので、そういう形の中でできたらおもしろいし、それを言葉にして言うと都市間F T Aという言葉で提言をしてみようと、そんなことを今考えていますので、ご紹介をさせていただこうと思いました。

【部会長】

今のお話、大変興味深かったんですけど、よくグローバル化の議論の中で都市間競争という言葉が出てくるんですね。だけど、おっしゃったように、競争しつつ連携していく。連携の中で競争していくという、連携と競争の関係をうまくつくっていくということが、これからおそらく必要であつて、単なるグローバル化の中で競争するのではな

くて、ある仕組みの中で連携と競争を一体として考えていく、そういう関係をつくるべきではないかというふうに理解したのですが、そういうご主張でよろしいですね。

【委員】

国際都市にかかわって幾つか申し上げたいと思うんですけども、前回も私、幾つかの指摘をさせていただきましたし、今回、資料として出していただいた内容もあるんですが、国際化していく上で、やはり自分の国に対する考え方であるとか、あるいは自分たちの郷土に対する考え方、日本人としてどう考えるか、あるいは横浜に住んでいる横浜人としてどう地域を考えて、自分たちの歴史を考えていくか。そういう基本的なものがあって、私は初めて国際化が進んでいくのではないかなと。そうでなければ地に足がついてないんじゃないかなというふうに思うんですね。

今日、ちょっと自分自身でいろいろと資料を持ってきたんですが、中学校の歴史の教科書の序文で、なかなかおもしろいことを言っているものですから、ちょっとご披露させていただきたいと思うんですけども、歴史を学ぶ意義というんですね。これは今の時代の基準から見て、過去の不平や不公正を裁いたり告発をしたりすることではないと。過去のそれぞれの時代にはそれぞれの時代の特有の善悪があり、特有の幸福があったと、こうすることで、いろんな国にはそれぞれの歴史があって、それぞれの歴史観があると。例えば、ジョージ・ワシントンはアメリカがイギリスから独立戦争で独立を勝ち得たときの総司令官であり、合衆国の初代大統領であったと。アメリカにとっては建国の偉人である。しかし、戦争に敗れてアメリカという植民地を失ったイギリスにとっては必ずしも偉人ではないと。イギリスの歴史教科書には、今でもワシントンの名が書かれていないものや、独立軍が反乱軍として扱われているものもあると、こういうことなんですね。何を言いたいかというと、歴史を固定的に動かないように考えるのはやめようと。歴史に善悪を当てはめて、今の道徳で裁く場とすることもやめようと。いわゆる自分たちと違う考え方をどう受け入れていくかということが歴史にとって、歴史を学ぶことの大切なことなんだと、こういうようなことが書かれているわけですね。私は、やはりこういう相手、違う文化や違う歴史観を受け入れるということが、やはり国際化にとっては必要だと思っていまして、そのためにも、やはり自分たちの歴史というものを学ぶ必要があるんじゃないかなというふうに思うんですね。ぜひ、これからの四半世紀の横浜の指針になるわけでありますので、こういった子供たちの教育なども私は重要なことだと思っています。

それと、やはり国際化をしていく上で、どうしても英語教育というふうにとらわれがちなんです、もちろん英語も必要だと思うんですけども、私はむしろ多言語として考えるべきだと思うんですね。言葉というのは私はリズムだと思っていて、音楽と一緒にだと思っているんですね。これは人間が自分の国の言葉を学んでいく過程もそうだと思うんですが、何も文法や言葉を初めから学ぶわけではなくて、リズムや音楽を体で感じるごとくに、やはり言葉を学んでいくわけで、こういった環境を整えていく必要があると思いますし、日本語以外の発音であるとか言葉であるとか、そういったものを体で子供たちが感じることで、そういう環境をつくっていくことが必要なことではないかなというふうに思います。これは自分自身の体験からでもあるんですけども、例えば言葉を勉強していく上で、コップに水をなみなみとついでいくと、まだすき間があるときにはこぼれませんが、なみなみついで表面張力が耐えられなくなると、ぼろっと水がこぼれます。これが言葉なんですね。自分の頭の中や体の中にいろんな言葉の音が入ってきて、それが満たされて自分の言葉として出ていくと、こういうことで、やはり言葉を学んでいくんじゃないかなというふうに思います。でありますので、例えば中学生の1年から英語を勉強するわけですが、中学校1年、2年、3年で、学校で試験があって、通信簿で1だとか2だとか評価を受けるんですけども、生まれたばかりの赤ちゃん、1歳、2歳の子に、あなたは日本語がまだできないから1だとか2だとかというような評価を下さないのと同じように、外国語に評価を下すのはいかなものかなと。むしろそういう環境を整えていく親や社会に対して、僕は通信簿をつけるべきじゃないかなというふうに思います。

それと、前回、私の資料要求で出していただいた車内の携帯電話の扱いなんです、これは非常におもしろくまとめていただいたと思っているんですが、実は今日も私、都内で会議がありまして、車で行こうかと思ったんですが、やはり環境のことを考えれば電車で行くべきだと思って、電車で行きました。そういうときに限っているんな電話が入ってくるんですが、車内では電話を使えませんので留守番電話になったわけではありますが、資料で出していただいたように、この資料にも出ていとおりの、日本だけですね、この資料を出していただいて全く話できませんというのは。こういったように、例えば横浜が国際都市あるいはビジネス都市を標榜していく上で、地下鉄の1車両でもいいから携帯電話が使えるような車両を1車両使う。ビジネスを大いに車内でもやってくださいと、こういうようなことも既成の概念から、やはり少しかけ離れたところで立ちど

まって考えることも必要じゃないかなと。この1つの例として僕は携帯電話を挙げましたけれども、こういうように日本の考えているスタンダードが、実はグローバルから見るとスタンダードじゃないということは、幾つかあるんじゃないかなというふうに思います。

それと、非常に興味深いなと思ったのは、これは一般の市民の方からの意見ではないかと思うんですが、外国人が公務員や消防団員など地域の集団的な活動に参加するのはいかがかと、こういうご指摘がありました。

これは、私は定住外国人と市民との区別をどうつけるかという問題だと思うんですね。公務員というのは、やはりこれは公権力の行使と公の意思の形成という、やはり言ってみれば権力を使える立場にあるわけですので、そういった人たちの、私は外国人に対して差別はしてはいけないと思いますが、合理的な区別はやっぱりしていく必要があるんじゃないかなと、こういうふうに思っております。でありますので、地域に大いに定住外国人の方が参加していただくことは、必要なことだと思いますけれども、なかなか公権力を発動したり、あるいは公の意思を形成するような立場にある職に外国人が参入するのはいかなものかなというふうにも思っております。以上です。

【委員】

この都市構造の中で、農業問題でよろしいですか。

【部会長】

いいですよ。

【委員】

では、都市農業という中で、前回、委員さんから2つくらい意見をいただいておりますが、私たちは横浜農業、今後どう残していくのか、これが一番大きなあれだと思っております。横浜市内には現在、農地が3,400ヘクタールあるんですよ。3,400ヘクタールというのは、横浜の総面積の7.8%になります。この農地面積は神奈川県内の各都市に比べて一番なんです。それだけ非常に広い農地を保有しております、私どもあれでいきますと、ここにありますように、横浜の野菜が市民の自給率30%と踏んでおります。いただきました資料では、野菜類は18.何%となっておりますけれども、これは統計局を通った数字だと思うんです。横浜の農業は統計局を通らない、やっぱり顔の見える農業、産地直送で庭先販売が相当多く占めるわけです。ですから、大体30%というのが普通なんです。総生産額も150億あるだろうと。これは緑政局とか

の推計でね。農協に販売として通る、農協事業として通るのが、そのほとんどわずかで、大体30億ぐらいなんです。というのは、そのほか全部直接、先ほど会議始まる前に先生とお話ししましたように、ハマナシ、あれは農協を通してないんです。直接やるほうが有利だから。農協の事業を通りましても経費がかかるだけですから、私どもは売られたお金を農協に貯金していただく、または生産の材料を農協から供給させてもらう、そういうことでいいよと、こういう言い方でやっております。それで30%と言いながらも、ほんとうに私ども、今350万市民と言っています、これを見ますと357になっていますけど、それだけの農地があって農業を展開しておるのがご理解いただけない部分が相当あると思うんですよ。そんなに農業があるのかなということすらわからない人が多いと思うんです。ですから、もっとこれを知ってもらう努力が必要だと。

それで、横浜市内でできているものをいかに市民に供給するか、これがこれからの都市農業の生きていく道だろうと。今、それぞれ直売やっておられますのを、一度もっとネットワーク化して、いろんな産物をやり合っ、どこへ行っても、横浜産の野菜はこの直売でもあるよと、こういうものを構築する必要があるだろうと。

特に昨年から努力しておりますのは、農政についてなんです。今まで市の農政と農協の営農指導と、なかなか一緒にならない部分があるんです。これからの都市農業というのは、農協の営農指導だ、横浜の農政だというんじゃ、これは農業をやっていかれないだろうと。横浜の農業も埋没しちゃうだろうと。横浜の役所の中でも農が埋没してるんじゃないのによく言うんです。昔はちゃんと農が出てた。緑政局というのがありましたけど、今はもっと大きな面で見えられたというんだけど、環境創造局になっちゃいました。農が出てこないんですね。そういう中での1分野になりましたけど、それともかくといたしまして、今、私どもはやっぱり市の農政と一体になってやろうということで、ちょうど、昨年から毎月一緒に会議を持って、いろいろやっております。ちょっといい面が出てきたかなと。

それで、やはり直に市民からはっきりわかるような農業をどう構築していくか。私どもは、この農業をどう継続するかですけど、この資料を見ますと、今3,400あるんですけど、2,200ぐらいは継続したいなんていうのがありましたけれど、そういう中で一番考えるのは20年先にあるかなというのが心配なんです。それは、やはり非常に環境問題と、それと税制なんですよ。

私ども、今、全国的に見ても農業、非常に厳しい中で、私たちはいつも言っているの

は、横浜の農業が最後まで残ると。それは食べていけるからなんです。農業が衰退していくのは食べていられないから。地方の農業はどんどん、個としては残る部分があっても面としての農業というのは非常につぶれていきますよね、食べていられないから。横浜の農業者というのは、幸いにしてこういう地域でありますので、農外の収入があります。そういう問題で、やっぱり食べていかれるから、農業は農業として自分の先祖から引き継いだこれを営々として誇りとして持ってやっている人が多いんです。でも、そこには必ず相続が発生します。大きな税金がありますと、否応なしに税金の問題、今の民法の問題で均分相続になってきますと。そういう中で、これが今後引き継いでいられるのかなというのが一番大きな問題なんです。労働力不足も出てきますが、それらを今、やっぱり子どもが考えているのは、市民を取り込んだ農業、今、役所のほうでもいろいろ市民に農業講座を持っていただいている部分があるんですが、まだまだほんとうの部分的なものですので、それらをもっと、そういう中でも市民が、やっぱりある程度の年齢になられて仕事をリタイアされた人、土に親しみたいという人は相当あるんですね。市民農園とか体験農業とか、いろいろやっておりますが、もっと面として、それが横浜の農業が維持継続できる制度にどうもっていけばいいのかというのが今一番頭の痛いところなんですけどね。子ども検討会でどうしようもないのが税金問題なんです。

【部会長】

やっぱり相続税ですか。

【委員】

はい、相続税なんです。均分相続の中では、兄弟の中にはいろんな人がいます。昔の家長制度ですと、この農地は残さなきゃということで、これは家をとる人ができるわけですが、今はそういう中で、いろいろな中でこういう皆さん方からも農業をどうしていくのかというようなご意見をいただいていますので、そういう中でともに考えたいなと。食べていければ農業は残るんですけど、その代は残りますけど、相続になると食べていられる農業でもできない。現に、ちょっと長くなりますけれども、悲しい実例としては、農業者、たくさん自分のところに財産ありました。だけど、そこがほんとうに農業をやる土地、市街化調整区域だった。大きな相続税があります。市街化調整でも農地山林でも、高い相続税が来ます。相続税が払えない、家族がみんな心配している。悲しい実例があるんです。ですから、非常にそういう問題は、こういう中で幾ら考えても、これは国を巻き込んだものじゃないとできない部分があります。子どもよく言うのは、農

地を相続して農業をやる場合は、相続税はずっと農業やってるうちは免除になってもいいんじゃないかと。そのくらいにしなかったら、横浜農業どころじゃなく、日本の農業というのは成り立たないだろうと思います。そういう中で、ひとつよろしく願いしたいと思います。

とりあえず第1回目は、そこで切らせていただきます。

【部会長】

関連してのご意見ですか。

【委員】

せっかくですから、関連してちょっと発言させていただきますけれども、私は農業を応援したい、そして今のお話のように、20年後、しっかりと横浜の都市農業が残っていただきたい。そして市民に知っていただく、理解していただく、そしてまた市民を取り込んだ農業、これを応援する立場で一言、ちょっと発言をさせていただきたいと思っているんですけれども。

横浜市、大変、農地面積が大きいんですけれども、一方でここに書いてある都市と農業を分けるんじゃなくて、都市の中に農業がどう育成されていくか、発展していくか、また残っていくかという、やっぱりこれも国際的な都市国家、都市をつくっていく中でも、一方で大事な問題かなと。それから、もう1つは今お話のあったように、農業と環境の問題が出てきますから、都市、農業、環境、こういうことから、ひとつご提案というか、1回考えていただきたいのは、特に農家は生産をする上で農薬を使いますよね。非常に化学物質について大変な、今、アスベストも含めて大変環境問題が騒がれております。特に農家につきましては、生産性を重んじるということから、農薬についている工夫されて使っていますね。そういった部分では、農薬を使う農家の皆さん方の安全性を考えて、さまざま農薬については注意書きだとか、また農協さんも含めて指導なんかもされているわけですね。ただ、都市における農業というのは、畑の横にもう既に住宅がある。そして、先ほどあったように相続がありますから、畑を今までやってきた人が相続の問題でどうしても土地を手放さなければならない。そうすると、もうすぐ目の前がマンション。一方で畑を耕している。そこでもって農薬を散布する。一方で、すぐ横で布団を干している、窓を開けている。そして一方では環境問題で化学物質でもって悩んでいる方がいる。化学物質過敏症だどうだこうだから始まって、3人に1人はアレルギー性疾患を持っている、国民病とも言われている。こういう中で、たしか2年

ほど前に県、市、それから農協さん、皆さん方が協力して農薬散布についてのあるルールをつくったわけですね。やはり、こういう20年後の横浜農業を活性化させていく、残していく、そして都市における農業を充実させていくということから考えますと、今の環境問題と都市部における農業、しかも市民に理解をしてもらえるということを考えますと、税制問題もありますけれども、一方でこの辺の環境問題というか、そういった、例えば一例ですけれども、農薬散布の問題なんかも、ほんとうにしっかりと住民同士が理解し合わないと、なかなか進んでいかないなど。そういった部分では、非常に農協さんが横浜市の農政と連携して取り組んだ、大変これは全国でも珍しいケースじゃないかなと、農薬散布についてのガイドラインをつくったんですね。これで、たしか北里大学の化学物質、アレルギーに対して大変権威のある先生から、これは環境問題についても、そしてまたそういった化学物質についても大変有意義なガイドラインだというような話がありましたけれども、こういったことも一方で、いわゆる農家が存続するための自助努力として、農協さんも、また農政の我々市側もしっかり考えていかなきゃいけないなどというようなことも含めて、都市における農業ということから考えますと、何とかみんなでグローバル化を踏まえながら、そういったことも応援したいなど、こういうことをちょっと1点、関連してお話ししたかったというふうに思います。

それからもう1点、私もさきの部会で幾つかさせていただきまして、わざわざ資料をつくっていただきました。ありがとうございました。52ページにありましたけれども、横浜市のグローバル化という話がありました。そして、どうすれば横浜市における多文化が共生できるかというような大きなテーマを、確か先の部会であったときに、悪いんですけれども、うちのほうの郊外部のほうで、もう既に多文化の共生頑張っているところがありますよということで、一例として、確か泉区だと思うんですね。泉区にあります県営いちょう団地というところで、実はこれを見てわかるように、総所帯数が2,238所帯のうち、18.5%の方が外国人の方であると。そういう中で、団地内の放送も日本、中国、ベトナム、カンボジア、スペイン語でもって放送してるとか、学校もそういった形でもって、すべて協力し合って、学校の教育関係もそこで既にやってますよとか、さまざまな情報誌も発行してますよとか、いわゆるその地域で多文化の共生がある意味では、少しずつ横浜でも行われているケースがありますよという例をちょっと挙げさせていただいたんですけれども、今回、こういう資料をつくっていただきまして、なおさらよくわかるかなと。大学とも共同しながら、多文化共生を既に郊外区でやって

いるという、そういったようなことを踏まえながら、こんなのも大変、本市のグローバル化についてのいい参考例になるのかなと思いましたので、本当にこの資料をまずありがとうございました。こういったものを踏まえながら、今後発言もしてまいりたいなと思います。

最後に、先ほど委員から発言がありましたが、大変私も興味ありました都市間競争、都市間の協力。これは、いろいろとこういう話はされてはいるんですけども、そこにはそれぞれのエゴやら、それぞれの利害関係があるわけですよ。ですから、そういう提言をすることは自由であって、そういう考えはだれしも持っていると思うんですね。都市間競争、都市間協力。それは今まで横浜市だって都市間競争・協力は少なからずやってきたわけですよ。したがって、そういうことを我々が発言するのはいいんですけども、具体的に何をどうするのかというところまで、もし考えておられるのであれば、具体的な事例をちょっと挙げていただければ、今後の議論の進展に大きく貢献するんじゃないかなということで、何か具体的にもしあれば、部会長よろしければ、許していただければ。

【部会長】

若干、先ほどの発言の中にもありましたけれども、重ねて何かありませんか。

【委員】

具体的に実現する、しないというのは、まだこれからいろいろ提案していく中で、その実現性というのは、これからまだ勉強していかなければいけないと思うんですけども、都市間FTAという部分に関しましては、まず貿易の、例えば手続の簡素化であったりとか、人材の交流であったりとか、特にお互いの都市に存在する会社間の協力であったりとか、例えば海外にブランチをつくるときには、その都市につくるときには優先的にできるとか、そんなこともできるのかもしれないし、そういう都市から海外の企業を誘致してくるときには、ほかの都市から誘致してくるよりも、そういう協定を結んでいる都市からの誘致のときには特別な優遇措置みたいなものを設けるとか、仲のいい都市に関してはどんどん交流を深めていくとか、そういう中で実績を積み上げていって、将来的に合併というのは、またちょっと極端な話なのかもしれませんが、さまざまな形での経済的な結びつきを規制緩和であったり条例の改正であったり、もしかしたら国の法律を変えなきゃいけないこともあるのかもしれないですけどもやれることはたくさんあると思います。それこそ極端な話で言ってしまうと、今、北方領土に

はビザなしで行けたりというようなこともありますけれども、そういう協定を結んでい
る都市間で、例えば船で行くときに限ってはパスポートなんかも、かなり簡素化した形
の中で手続きができるとか、そんなようないろんな可能性はあるのではないかというふう
には考えています。まだ具体的ではありませんが。

【委員】

都市農業を応援していただけた委員さんにお答えというか、お答えの気持ちというの
は、今、そのような自助努力もしておるわけですが、非常に農業というのは自然、1つ
農薬散布について気をつけること、風下に人家があるときは風上からやりなさいと言
いまして、いつもそのような風の流れじゃないんですよね。それで、ちょうど病気が出
たときとタイミングが合わないとやらざるを得ないときもある。今、布団を干してい
られる、これは迷惑だ。じゃ、朝のうちにやろうと、そういう努力をします。朝のう
ちはうるさいということにもなる。農業者が一番、農薬散布はしたくないんですよ。消
費者が騒がれるよりも以上に農業者がしたくないんです。生産コストが上がりますし、
一番身近に農薬が襲うのは農業者なんです。ですから、農薬を使わないような農業を
いろいろ研究しているんですが、一般的にはなかなかそこまで浸透できない。最小限の農
薬で農業をやろうよと、そういうことをやっております。先ほどの3,400ヘクター
ルの農地の中で、780ばかりは市街化の中にあるんですよ。この市街化の農業とい
うのは一番ね。また、市街化の中に緑があるというのは、すごくバランスがあっていいと。
特に何か災害のときには、そこが1つの緩衝地帯になるといいですか、要するに阪神大
震災でも、広い道路はそこが防火帯になったわけですよ。そういう中で、私どもは都市
農業を理解していただくために、それを受けて、市街化の中の特に生産緑地をしている
農地には、生産緑地が780のうち350ヘクタールばかりあるんです。これは死ぬま
で農業やっていくよという農地なんです。それらを横浜市と協定を結びまして、防災
協力農地という制度をつくって、万が一のときには緊急の輸送基地にしてくださいよ、
仮設住宅の基地に使ってくださいよという中で申し出をして、全然何も求めない。提供
して、防災協力農地にしてあるんですけども、それらも、やはり都市農業を理解して
いただくための1つの方策と私どもはとらえて進めておるんですが、非常に、ですから、
やはり私どもは都市農業は住民等に理解を得られないと生きていられないんじゃない
かと、これは十二分にね。ですから、今言いましたように横浜の農業を知っていただく
ために、やはり市内にもアンテナショップ的なものもつくりたいなと。横浜農業って、

こんな多彩な農業をやってるんだということも、いろいろ検討はしております。以上です。

【委員】

実は食べられるまちづくりというふうに言わせていただいたの私だったんですけど、20年ほど前に東京で実は有機農業グループの中に入って、まちの中でこそ、都市の中でこそ農業ということをやっていました。そのときに、やはり農業というのは環境問題を考えてくると非常に重要であるということ、私はもちろん山梨県出身ですから、非常に自然豊かなところに暮らしていましたから、それが非常に重要だと思っていました。

今回、今、お話聞いて、こんなに横浜に農地があるとはほんとうに知りませんでした。ですから、私たちがこの横浜に来たときに食べているものの中におつくりになったものがあるんだと。そうすると、もっと、やはり今おっしゃったように、アンテナショップ的なものをつくって、みんなに知ってもらおうということは非常に重要かと思います。

それから、明日、私、山形に合宿で行くんですが、食べるものがとても楽しみなんです、そば街道とか。そうすると、やはり横浜に来たら横浜のおいしい野菜が食べられる。例えばホテルなんかに行っても、これは横浜の誰々さんがつくったものだということが、バイキングでよく地方に行くとありますよね。そういうことも考えられる。環境の問題、それから観光というところも非常につながってくるのではないかというふうに思います。

もう一つ、環境ということから言わせていただくと、やはりサービスのグリーン化ということをどんどん進めていく必要があるんじゃないかと思います。横浜は非常に観光都市ですから、ホテルそのものの中のサービスをグリーン化していく。既にいろんなところでやられているところがあるんですが、例えば歯ブラシを持ってきてもらうとか、そんなのも一つのあれですし、それから某ホテルでは、いわゆるアメニティを使わなかったらグリーンコインという形で、それを植林に回すとか、これだけホテルがある地域ですから、そういったことを進めていくということは、CO₂削減にも大いに貢献していけるのではないかと。それから、G30は、一応市民向けということになっていますけれども、ここに来られる方たちにも協力してもらえそうなシステムづくりを積極的にしていっていいのではないかなというふうに思いました。以上です。

【部会長】

横浜もあるホテルで、いろいろ食べ残しが出るので、それをうまく再利用できないか

ということで、実験的にやろうとしているところもあります。

【委員】

それ、農地で使っていただいて。

【部会長】

そうです。そういうつながりをね。

【委員】

学校給食。

【委員】

学校給食では、農家がこれを持ち込んで使っていただいております。

【部会長】

私はいつも農協の誰々さんがつくったトマトとか、そういうのを食べてますので。名前みんな、ついてます。

【委員】

地産地消というやつですね。

【委員】

今日も来るときに、やっぱりメンバーさんのあれを見ても、横浜の農業をあまりご理解してられない人が多いだろうから、これを持っていったらと、横浜の地域農業振興計画書と言われて出されたんだけど、いきなり持っていくのも失礼じゃないのかと。

【部会長】

遠慮せずにどんどん資料を出してください。

【委員】

それで、先ほど言いましたPRするのなんて、やっぱり観光を兼ねて、先ほど言いました直売所のマップをつくって、そこを次から次に歩いてもらうような、こういうことも今後の地域農業振興計画の中じゃ考える必要があるだろうと、こういうものを持っております。そういうことによって、やはり横浜の農業を自分たちのものとしてとらえていただきたいと。

実はちょっとした会議で市長さんにお会いしたケースがあるんですよ。そういう中で、こんなこと言っちゃっていいのか、ざっくばらんに、こういう調子で言ったんです。横浜にも、MM21に使ってない土地がたくさんあるでしょうと。使いたくても、だれも

使い手いない。10年間ただで貸してもらえないかなと。アンテナショップでPRに使いたいよと。いろいろ考えていただいているようだけど、10年じゃちょっと難しいんじゃないかと、そこにいられた人がね。何年、何カ月か前に言ったら、横浜が使えるときに返してもらえればなんていう話もあったんですけど、私ども、真剣にそういうことも考えているんですけど、そんなことを農協に帰って話したら、確かにそれ、アンテナショップ的で一番目につくけど、そこでやっても消費者というのはMM21というのはあまり少ないんだよなと。それがどうなのかな。でも、そんな投げ方はしてあるので、ぜひ今度はそれをつくるときには、そういうことも検討の材料に入れておけよと指示したんですけどね。やっぱり目につくところに、皆さんが多くの目に触れるところにアンテナショップというのは必要ですので、そんな話もして、横浜農業の生き残りというか、維持継続できるように、いろいろなことは考えておるところです。

【部会長】

ありがとうございました。じゃ、お願いします。

【委員】

なかなかすばらしいアイデアがたくさん出まして、考えることがこれからたくさんあると思うんですけども、僕はこれから横浜の都市計画として、二極的なアプローチをとればいいと思うんですけども、1つは経済的に近代化しなくてはいけないと思いついて、それは具体的にどういうことかということ、こういう都市構造の産業の活性化という部分がありまして、下のところに横浜は国際的産業を大事にしてきたので、それを伸ばせばいいんじゃないですかというのがありまして、これを読んだところは、ちょっと疑問にしていたところがありまして、産業といえばピンキリなんですけれども、いろいろありまして、終戦後、日本は量産産業とか重工業で成功してきたんですけども、もう時代とか経済的な環境が変わりまして、これから伸びる分野に集中していくべきと思います。例えばバイオテク、ナノテク、社会で必要な技術とかを開発する企業とかを、なるべく横浜に招く必要があると思います。ですから、そのようなナノテクとかバイオテクの企業は、どういう環境とか、どういうエネルギー設備とか、具体的にどういう構造が必要なのかを検討する必要があると思います。

そして、なるべく横浜の特徴を生かしていきたいと思います。この間の週末に横浜の未来を考えるシンポジウムで、横浜として誇るべき点がたくさんあると思うようになってきたんですけども、1つは東京に近いというところをなるべく生かせばいいと思

ます。アメリカでいうと、シリコンバレーとかいうのがありまして、大都市のサンフランシスコの近くにあるサンホセにあって、ITとか半導体、いろんな新技術をつくっている企業が密集している地域になっています。あとは横浜の教育水準とか個人所得水準が高いというところで、それを生かせないかなと思って。なるべくこれから伸びていく企業とかに優しい経済的な環境とか税制をつくれればいいと思います。

そして、もう1つは環境と調和した都市像。それ、さっき言った近代化とは逆ベクトルに言ってると思うかもしれないんですけども、実は日本社会とか、日本だけではないんですけども、世界を見たら、やっぱり量産とか近代の都市化から回避している、指標はあちこちに出ていると思うんですけども、1つはニートとかフリーターの問題ですよね。中田市長はよくニートとかフリーターの問題を話題にしているんですけども、この都市構造の職住近接ですが、横浜に住んで働ける女性や高齢者も働きやすい環境をつくりましょう、僕はニートも働きやすい環境をつくれればいいと思います。それはどういうことかという、ニートとか若い世代の日本人に、何をやりたいかとか、どういう希望があるかを聞いたら、みんな海外旅行行きたい、みんな芸術とかやりたい、もっと緑がいっぱいあるところか行きたい、もっと休暇とかが欲しい。そしてすごい日本人の年配の方との価値観とかが全く違うんですけども、彼らにもすごい大きな潜在的な能力があると思います。彼らは日本の次の世代とか、これからつくっていくので、なるべくニートの希望、要は自然環境と調和した、もっと休暇がとれるような都市像とかをつくれればいいと思います。

もう1つ、環境と調和した都市像をつくりましょうというのは、観光のところに似てるんですけども、外国人が日本に観光するとき、新しいMM21のところとか東京よりは、やっぱり昔の日本を見たいんですよ。鎌倉だろうが京都、姫路、いろいろあるんですけども、日本の都市開発とかを見ると、MM21みたいな計画が多いんですよ。私は、それはそれでいいと思います。私はたまにブランド品とか買い物をしたときはMM21に行くんですけども、やっぱり、行くと落ちつかないです。私が好きな日本は、もっと地味な、これ、内緒にすればいいと思うんですけど、実は私は弘明寺の立ち飲みの常連さんなんです。昔の日本の立ち飲みとかは、野毛町、昔の日本がすごい大好きだと思うので、ちょっと今、日本の都市開発で地味な下町のところが犠牲にされていることだと思います。ですから、これからなるべく地味な、古風な日本を強化していけば、観光客もいっぱい来ると思うし、いい都市になるのではないかと私は思いま

す。

【部会長】

野毛のグローバル化ですか。

【委員】

関連して。今の発言で、私、共感したんですけれども、実は今日、ある都市に視察へ行きまして、この顔づくり、まちづくりといいますか、にぎわい事業を視察してまいりました。国の認可で360億ぐらいトータルでかかって、この都市の年間予算が800億ぐらいの予算規模で市単独で出す単費が120億と。それだけかけてその事業をやるという駅前の区画整理事業なんですけれども、この都市としては、自分のところの顔づくりだというふうに思っていますけれども、私がいろいろ説明を聞くと、どこにでもある顔だなというふうに思えちゃうんですね。だから、町々の特徴を生かすということが、ともすると、例えば女性の顔だったら、あの顔になりたいなと、男性の顔だったら、あの顔になりたいなというのが、だれでもそういうイメージが持っていて、都市をつくる思いや願いが、その人に全部似てきちゃうといいますかね。それがほんとうに顔づくりなのかなというのが、私は感じました。だから、横浜の良さというものをいかに今、立ち飲みがお好きだと、そういった文化や、横浜ならではのものを、やっぱり残しながら国際化を図っていくということが僕は重要じゃないかなと今、お聞きしていて感じました。それは関連してですけれども。

それからもう1つ、都市構造の中で、産業の活性化ということで、先ほど農業の話が出ましたけれども、私はものづくりというのは横浜の昔からやってきた、東京の羽田に近い臨港の、こういう京浜工業地帯の中に位置していますから、この中にもものづくりの産業について、少し語られていないんじゃないかなというふうに思います。私もデータをお願いしたところ、外資系の企業が横浜に進出してきているデータがありますけれども、非常にこの数年間で多くの外国企業が横浜に進出してきていると。僕はこの産業の世界でもグローバル化が進んでいて、民間の企業さんも一時は、例えばシンガポールだとかマレーシアだとかいうところに生産拠点を置いて、そこで製造コストを下げするために置いた。それはもう数年で終わって、次はベトナムだ、次は中国だと、生産拠点が動いているんですよ。その中で、僕はその後、中国が横浜を選んで外資系の企業が来るというのは、僕は技術力だというふうに思うんですよ。

民間の企業さんに聞くと、表へ出て行く意味が今、問われているらしいんですよ。逆

に日本の中で技術力を生かして生産をすると。特にITの中では液晶の分野で、かなり日本に、台湾から韓国の企業と提携して生産拠点を日本に置いていこうと、こういう動きが出てきていますけれども、それはやっぱり技術力と、それからマーケティングだというふうに思うんですね。そこをやっぱり横浜は製造業について、僕は力を入れていくべきだし、製造業に力を入れることによって雇用の創出といいますか、安定といいますか、それにもつながる内容ですし、さっきニートだとか、いろいろフリーターというのが出てきましたけれども、製造業に入れば技術を持たないと勤められないということがありますから、固定の従事するということになってくるというふうに思うんですね。これから僕は産業が戻ってくる、今まで海外進出を、中国ですら今、バブルが弾けて、先どうなるかわからないという状況の中で、僕はカムバックといいますか、ブーメラン現象で、また日本にそういった製造業が戻ってくるような兆しがあるんじゃないかなと。そのときに、この製造業の育成をしておかないと、これは技術、技能の伝承というのはすぐにはできないわけですから、今の横浜の技術・技能を持った、特に中小零細の企業をいかに国際競争力に勝てる力をバックアップしていくかというのが、今後の横浜の国際化に向けた生き残りの1つの中にも入ってくるんじゃないかなというふうに思います。

先ほどの農業も、できれば農業で雇用が生まれるような、横浜の農業が産業的に発展してくれば、雇用も生んでいただければなと。今、横浜市内の農業従事者というのは、どちらかというとお父さんとお母さんと家族でやっている農業が主ですけども、ぜひそれを生産力を上げて、僕は雇用も生むような農業に発展していってもらえればなというふうに思っております。

【部会長】

今おっしゃったように、日本の産業の中核になる技術を使った製造は海外に出さないという方向になってますよね。キヤノンなんか、完全にそういうふうになっています。

【委員】

鉄鋼業もそうです。

【部会長】

おそらくそういうふうに戻ってきて、それと、おそらく横浜に地からある中小企業とのつながりがどうなのかと、改めてそういう議論が出てくるのではないかなと思っております。

ほかに。

【委員】

先ほどの話に関連するんですが、私のアメリカの友人が横浜に新婚旅行に来たいというんですね。私もちょっと心配になりましたので、何で横浜に来るんだと聞きましたら、ベイスターズの試合を見て野毛で一杯やりたいというわけですね。インターネットで調べたら、どうもおもしろいチームがあって、アメリカでプレーした自分のファンの選手が出ているので、ぜひベイスターズの試合が見たいと。これ、よくよく考えてみると、これは横浜でしか見れないわけですね。他の球場でも見れますが、ホームグラウンドである横浜の球場じゃなきゃ見れない。それと、野毛も横浜にしかないわけですね。ですから、やっぱりオンリーワンの大切さというか、横浜でなければ体験できないことを体験してもらおうと。先ほどの話で、どこでもあるようなまちづくりをしていたのであれば、やっぱりだめじゃないかなというふうな率直な感想を持ちました。

それと、ちょっと議論があっち行ったりこっち行ったりなんですが、環境の関係で申し上げたいんですが、緑の7大拠点って横浜市が里山を残していこうと、こういうことに取り組んでいるわけですけども、例えば市民の森にしようとしても、地権者にしてみると、市民の森じゃ不安なんですね。やっぱり相続が発生したときにキャッシュが必要になりますので、そのときは非常に不安です。例えば緑地保全をかけてもらったり、あるいは横浜市が買い取ったり、国が買い取ったりと、こういうような手当をしてくれれば協力をしましょうと、こういうことになるんですが、なかなかその後の出口のところをしっかりとしてもらわなければ、なかなか緑を残すことはできないと。都市部において緑を残すことは非常にお金のかかることでもありますので、何とか知恵を絞る必要があるんじゃないかなと思うんですね。一方で、横浜市は土地開発公社なども含めて、土地をいっぱい持ってるんですね。市街化にもありますし、市街化調整にもあります。例えばこういったところと等価交換とかができれば、地権者してみれば土地利用ができる、横浜市は緑を保全することができる、こういうような、例えば土地開発公社であれば時価簿価の問題ありますけど、これはどこかで1回整理しなきゃならない問題だと思いますけれども、そういった知恵を絞る必要があるのではないかなと。そういうことによって緑を保全する必要があるんじゃないかなというふうにも思います。

私がお願いをした資料の中に、レッドデータに出てくる希少種が横浜でどれくらいあるんですかと、こういうことなんですが、非常に多くの絶滅を危惧されている動植物が

横浜市内にもまだいっぱい残っているわけですね。

【委員】

すいません。どこ見ているんですか。

【委員】

ごめんなさい、97ページですが、ホトケドジョウとか、メダカも絶滅危惧種になっているのはちょっと悲しいんですが、それとかオオタカですとか、非常に広範囲に及んでいます。植物もそうですけれども、実はこういうものがどういうところにあるかというと、人が住んでいるすぐ近く、市街化されているすぐ近くの里山なんですね。ですから、これはやはり手を差し伸べなければ、横浜の中のレッドデータの資料として今は出ていますが、仮にまた同じような機会があって資料要求したときには出てこなくなる可能性もあるというふうなことではないかと思います。例えばオオタカなどはいろんなところを回遊していますので、森と森を移動します。その中間にある森がなくなるとオオタカは移動できませんので、別のところを探します。あるいは住むところがなくなってしまふ。こういうようなことがありますので、私たちの住んでいるところも含めて、自然をある意味いじめて、実は人が住んでいるわけでありまして、そういった残されたところをどう守るかというのは、お金もかかるかもしれませんが、やはり知恵も私は絞っていく必要があると思います。ましてや、こういった環境省が指定しているレッドデータに出てくるような希少な動植物については守るという姿勢を、やはり行政が打ち出さなければ守れないものなのではないかなというふうに思います。

それと、ちょっと国際都市のところにまた戻ってしまいますけれども、今日もちょっと電車に乗りまして、電車の切符を買うときにふと思ったんですが、この料金表を見て、日本語のわからない人は果たして買えるかなと思ったんですね。多分、買えないと思います。私も経験がありまして、ドイツに行ったときに電車の切符が買えないんですね。多分、このぐらいのところじゃないかなと思って当てずっぽうで買いましたけれども、たまたま検札が来なかったからよかったんですが、もし間違っていた切符を買ったら大変なことになっていたわけですから、日本の地下鉄も含めて、電車、非常に乗りづらいと思います。ようやく横浜市営地下鉄は番号を振りましたので、何となくその番号だけ覚えていれば行けると、こういうふうになりますが、あと東京メトロも番号とアルファベットを振りましたから、ようやくそこへ行けるとは思います。料金表などは日本語でしか記載されておられません。小さいところに英語表記がありますけれども、こうい

ったところも、やはり外国人の視点、日本語がわからない人の視点に立つ必要があるんじゃないかなというふうに思います。

先ほど、私、多言語の話をしました。僕はやっぱり近くの国の言葉、韓国語、中国語、ロシア語、まず隣の国の言葉から僕は勉強する必要があるんじゃないかなと。遠いところの国の言葉も勉強する必要がありますが、まずは自分の隣の国の言葉、あいさつできたり、そういうことも必要じゃないかなというふうに思っております。

ちょっと時間があれですから、なかなか多岐にわたっての話なので議論が散漫になってしまいますけれども、思いついたばかりに申し上げました。

【部会長】

ほかに。まだご発言いただいていない人、時間が少しずつ迫ってきています。

【委員】

それでは、私は先週開催されましたシンポジウムのほうに参加をさせていただいて、大変いろいろな市民の方からのご意見ももちろんですし、それから竹中さんの話ですとか、市長の話ですとか、大変参考になることがあったなと思って。その中で気になった言葉として、成熟した社会に日本はないとか、そういう言葉があって、成熟した社会というのは、どういうことをこの方たちは言っているんだろうということを純粋に疑問に思ったんですね。もしそれが、いろいろなスタディーの結果、目指すべきものであるならば、じゃ、横浜の目指すべき成熟した社会って何なんだろうというのを、私のような市民の立場から申し上げますと、もう少しわかりやすい、かみ砕いた言葉で。都市像についてご議論されていて、すごく勉強になるんですけども、あるべき状態というのをいろいろとお話しされているのは、なるほどなと思うんですが、じゃ、私たちはどうしたらいいんだろうというのが、ちょっと遠いところに見えてしまうので、私たち市民に対して期待されている行動みたいなものを、もう少し、私たちの行動に置きかえるということというように、ビジョンの中などに入れていけると、すごく自分たちでも変わろうという意識に変わると思います。市長なんか盛んに市民が主語のビジョンになるべきだとおっしゃっているのは、あるべき状態をだれかが決めたのではなくて、私たちがこういうふうに行動すべきだというメッセージが入っているといいのかなというふうに感じました。

その都市像を考えると、いろいろと、今日も伸ばすべき産業についてのお話があったんですけども、私は勉強不足でそれが何なのかということとはわからないんですけ

れども、ただ、竹中さんなんかがおっしゃっていたのは、観光ということもおっしゃっていましたが、ものづくりについては、コアな部分は日本には必ず残るであろうということもおっしゃっていましたが、可処分時間が増加することによって、いろいろなサービスということが伸びるだろう。そういうものの中で横浜ならではのものというのは何なんだろうということ、先ほどベルナディアさんおっしゃった差別化も含めてクリアにして、少しでもクリアになって、それに対して私たちがどういうふうに参加していけるんだろうというような形で議論が進むと大変いいなというふうに感じております。私たちとしては、おそらく例えば市民を巻き込んだ農業という話も聞いておりますと、一人一人が自分の生活を守っていただけじゃなくて、社会に対して貢献していく、価値創造していくということを視点に持つことができると、今、語弊がないように申し上げたいんですけど、比較的恵まれた生活を送っている人が増えてくると、より高次の欲求というのが増えてきて、自己実現をしたいとか、人のために役立ちたい、社会とのつながりを持ちたい、そういう人は必ず増えているというふうに思っていて、そういう機会が提供されていて、いろいろな場で提供されていて、目指すべき状態に対してあなたの期待されている行動ってこういうものよというような、市民に対する人材要件と申しますか、こんな人が今、期待されているのよと。例えばニートとかフリーターの方に対しても、こういう人はすごく今、これからの将来必要なのよ、20年後を見据えたとき、こういう人がいてくれると、こんな世の中になるのよというようなことが表現できると、すごくシンポジウムでもパワーのある方はたくさんいらしたので、同じ方向に向かって動き出せるのかななんていうことを思いました。

ちょっと散漫となりましたけれども、以上です。

【部会長】

竹中さんなんかのお話があり、我々が議論したシンポジウムがあり、その第2部で、分科会ごとに市民を交えて議論がありました。そのメインの司会とコーディネーターをされたお2人が部会に居られます。そのとき、私の印象に残ったのは、最終的な議論をしたものは、先ほど申し上げましたように構想なんですよね。しかし、構想はさまざまな細かい内容をベースに持った上で構想というのがないといけない。それはある部分、プログラムであったり、具体的にこうありたいという具体的な願いであったり、そういうものがベースにどれだけしっかりあるかということが構想を支えるだろうと思うんですね。そのための議論をここでやっていて、そういうお話がさまざまに今出ていると

思います。それをぜひ、最終的な成果が構想だというんじゃなくて、構想に至るさまざまな小さな要素がこれだけ出てきて、構想がまとまったんですよという、そういうまとめ方をぜひ事務局のほうにさせていただきたいんですね。どうもありがとうございます。

【委員】

都市構造の中で、今度は農業じゃなく、横浜の人口と住宅問題で1つなんですけど、この資料を見させていただいたら、横浜市の人口も20年のうちの前半の14～15年はまだ増えていくよと。あとの後半は減少になるようなことをちょっと見受けたんですけど、現在、横浜市の所帯数と住居数、そのバランスがどうなっているのか、ちょっと知り得ていないんですけど、おそらく住居数のほうが多いんじゃないかなと。

【部会長】

多いです、10%ぐらい。

【委員】

多いでしょう。それが私どもの仕事をやっている中で、住宅産業の中で絶えず空き家、空き室が出ているわけです。そういう状態でありながら、地域、立地条件のよいところ、どんどん新しい建物が建っていきます。14～15年たって少子高齢化がもっと進んだ場合、極端な言い方しますと、横浜市でも日本と同じように過疎と過密が出てくる。そういう立地条件の悪いところにはどんどん空き家、空き室が出てくると思うんです。もう、そうなってくると経営的に成り立たないと、今度は古いところを建て直すというのは、新しい人が入るから建て直すわけです。ただ、取り壊すだけでもお金がかかりますから、なかなか手が回ってこなくなってくる。私はそういう現象が出てくるんじゃないかなと。そういう場合、横浜の中で、こういう市街化、MM21を中心としたこういうところはどんどん密集が強くなってきますけれど、郊外部、それも住みたくなる町と、住みたくなる沿線と言われるようなところはいいでしょうけど、そうじゃないところは、そのような廃墟になったところが、今、地方でありますような、そういう現象が横浜でも20年後には出てくるんじゃないかなと、私は非常に危惧しているんですね。ですから、そういう問題を含めて、住宅について、どうこれから必要があるのかなと、こう思っています。

【部会長】

まさにそういうテーマで、おそらく日本で最初の議論を横浜市の住宅政策審議会から始めます。まさにそういう問題意識で始めますので、その成果をちょっと期待し

ておいていただければと思います。

ほかにどうぞ。

【委員】

ちょっと私、お聞きしたいのは、G30のことですけれども、2010年までに30%ごみを減らすとか、そういうターゲットがありましたよね。これはごみを分別することにより30%減らすんですよね。そうではなく、私たちがつくるごみ自体を減らす、ライフスタイルを変えなくちゃいけない。

ごみ問題は、アジアの大都市にとって一番大きな環境問題なんですよ。アジア都市ではどこに捨てるか、そういう問題がありますが、G30についても、例えば私はコンポストिंगしたいんですけれども、でも今住んでいるところは土地がない。だからコンポストがなかなかできないんですね。都市農業では、コンポストからつながるサイクル、つまり、システムをまずつくるべきじゃないかなと思っています。他にもマンションの屋上緑化みたいな、そういうのができるのではと思います。それはグローバルウォーミングにも効果があり、緑のところは涼しくなるかなと思っています。

それから、先ほど都市農業のことなんですけど、例えば横浜が神奈川県とは関係なく、隣の都市とアライアンスを作ってみることもいいと思います。どうしてかという、都市計画はその周辺都市に影響や効果があるんですよ。そのコンセプト例は実はフランスにあるんですよ、例えばリヨンでは、リヨンをコアとしたリヨン大都市圏庁というのがあります。これは周りの都市とアライアンスをつくって、都市計画をつくる時には、情報を共有し、一緒に計画を策定していく、そういう例があります。このことが横浜でも可能かどうか、私もあまり知らないんですけれども。

【部会長】

少しやっていますよ、日本も。

【委員】

そうですね。それだけです。ありがとうございました。

【部会長】

たしか道志村との関係というのは、それに近いわけですよね。

【事務局】

道志村は水道施設を通じてやっていますけれど。

【部会長】

それ以外に何かありますか。

【事務局】

あと、行政というか、市民レベルでは鶴見川流域ということで、町田とか川崎ともつながりますけど。今のところ、それぐらいだと。

【部会長】

そんなに意欲的にやっているわけじゃない。

【委員】

例えばアソシエーションみたいな、例えばオーガナイズーションみたいな、これはリヨンにあるんですね。オーバルコミュニティ・グレーター・リヨンという名前なんです。リヨンシティじゃなくて、グレーター・リヨンなんですけど、そういうことが日本にあるかどうか、私もあまり知らないんですけど、それをつくれば、いろいろな計画とか、周りのいろいろやっているところ、インパクトがあると。

【部会長】

横浜は東京大都市圏の中に入っていますから、横浜独自のができてないんです。むしろつくるべきだと言う意見でしょうか。

【委員】

1 ついいですか。少し余談なんですけれども、この間もらったデータの中に、区別の資料がありまして、町別の外国人の人口とかのデータがあって、それを読んでもちょっとわからないと思っっていました、地図化してきました。

人口密度、みんなの密度と外国人密度、または中区とか西区の拡大図の一般人口、あとは外国人人口密度、また中華街とか、あそこら辺の拡大図、あと鶴見地区の拡大図、そして外国人口の割合の横浜全体。さっき、西区、中区の外国人割合の拡大図。そして、これ、おもしろい特徴としては、中区にある中華街、または横浜橋商店街あたりの外国人もしくは山手にある外国人とか鶴見に外国人がいっぱい住むのは当たり前なんですけれども、2 枚目に行くと、人口密度、外国人、横浜全体、一番西の端っこに泉区に 1 つ…。

【部会長】

これは先ほどのいちょう団地のことでしょうか。

【委員】

そうですね。そこと港南区に外国人が密集している町があるんです。それはなぜかと調べようとしていたら、一番最後のページに拡大図があるんですけども、泉区の上飯田町に、それは厚木の米軍基地の近所にあります、そこに米軍人がいっぱい住んでいるのではないかと思います。

【委員】

ちょっと違う。

【委員】

違うんですか。わかんないんですけど、そして港南区の港南4丁目、何でここに外国人が多いんだろうなと思って、調べたら刑務所があるんです。見ててちょっと悲しかったんですけども。一応、横浜市の外国人の密集しているところの特徴としては、こういうことがあると。

【部会長】

いろいろ議論してまいりましたが、ほぼ予定時間に来ております。そろそろこの辺で議論を終わりたいと思いますが、よろしいでしょうか。

【委員】

ちょっとよろしいですか。今後の進め方なんですけれども、これ、短期であと2回ですよ。今回も2時間、議論させていただきましたが、それぞれの項目で2時間ぐらいやるべき内容がほとんどなわけですよ。これ、事務局、ちょっと大変だと思うんですけど、個別にそれぞれの委員の方々から意見聴取をしていただければ、時間も有効に使えるんじゃないかと思いますので、ぜひそういう努力をしていただければなと思うんです。

【部会長】

どうですか、そういう提案。

【事務局】

今度、議事録をお送りするときに、またメールで使わせてもらったり、また訪問させていただいて、少しそういう形で厚みを持たせたいと考えています。

【部会長】

今回も欠席されている委員お2人にはヒアリングしたんですね。

【事務局】

しました。

【部会長】

それも入ってる。

【事務局】

入っています。

【会長】

それを少しずつやっていけば、最終的には皆さんのヒアリングが済むんじゃないかなと思ひまして、可能な部分をされればいいと思ひます。よろしいでしょうか。

それでは、事務局、何かありますか。

【事務局】

次回の3回目の部会ですが、9月8日、木曜日の同じ時間、17時から19時ということで、ちょっと都合の悪い方もいらっしゃるんですが、よろしくお願ひしたいと思ひます。会場はまた追って連絡させていただきますので、よろしくお願ひします。今日は熱心な議論ありがとうございました。

了